

校長室から

令和3年2月26日

卒業していく赤学年に送る「手紙」①

令和2年度の卒業シーズンが近づいてきました。最初は高等学校で、そして中学校、小学校と続きます。2ヶ月遅れでスタートした今年度でしたが、月日は確実に流れ、その日を迎えようとしています。中学校の卒業式は、9年間の義務教育の最後という筋目でもあります。小中学校は、学区制ということもあり、小学校を卒業しても、また同じメンバーが中学校で集います。もちろん、長町中学校のように複数の小学校が同じ中学校に入学すると、新しいメンバーとも出会い、関わりが広がる場合もあります。義務教育の9年間は、楽しい事も多くあると思いますが、学区内の比較的狭い範囲の中で学校生活が続くため、人間関係に疲れたり、それぞれの生活してきたプロフィールを知られていたり、苦しい事も多々あります。学校での出会いは偶然性が高く、目的を同じくして集団が形成されているわけでもありません。

思春期の皆さんには、そのようなことに苦しさもあるでしょうし、中学生になると、定期考査があるので、それまでぼんやりとして、目に見えなかった「学力」も、得意・不得意も少しずつ自分で理解できてくるようになります。他者と比較してしまう自分、比較される自分に苦しむこともあると思います。一緒にいる友人をうらやましいと感じる時もあるでしょう。どうしても好きになれない人もいるでしょう。誰かに何か言われているような気がして気になる、ということもあるかもしれません。初めて進路に向き合わなければならない大きな不安もあったでしょう。「自分なんか・・・」と切なくなる時もあるかもしれませんね。

私は中学生の時、一歳年上の兄と比較され、とても苦しみました。何をやっても、何か上手くいったことがあっても、兄にはかないませんでした。私の身近な人達、両親も含めて、だれもがそれを当然と思っていたと思います。兄が中学校を卒業した時、とても解放された気分になったことは、今でも忘れられません。「ああ、これで自由になった・・・」

しかし、中学校の昇降口に飾ってある野球部の優勝記念写真に兄が笑顔で写っているのが時々目に入り、あまりいい気分ではありませんでした。他にも様々な不安や不満がありました。しかし、そんな気持ちも高校生になると、少しずつ消滅したような気がします。「自分には自分の人生がある」と少しずつ気が付いてきたからかもしれません。その後は、様々な能力のある温厚な兄を心から尊敬するようになり、今は遠く離れて暮らしていますが、時々会いたくなります。不思議ですね。

中学生というのは、難しい時期です。活動できる範囲もまだまだ広くはなく、社会観や世界観も確立できていないので、もやもやした気持ちが続く時もありますし、自己も確立されていないような不安定な時期です。間違ったこともしでかしてしまいがちですが、気持ちは純粹で、とても正義感が強い時期でもあります。ネットに楽しみを見つけながら、いつのまにか炎上したり、中傷され被害者になったり、時に加害者になったり・・・。揺れ幅が大きく、葛藤が続きます。

しかし、そんな揺れ幅が大きい皆さんの年代でも、秘めた可能性やあふれ出る才能の伸びしろは大きく、目を見張る成長を遂げる時期でもあります。自分の気付いていなかった才能や力が突然引き出される事もあります。逆に自分の可能性を自ら消し去ってしまうことも・・・。揺れに揺れる難しい時期です。思春期は難しい。でもいつも中学生と接しながら思っている事があります。「もうすぐ光が見えるよ。だから・・・」

コロナ禍を乗り切ってきたこの1年はどうでしたか。これまでどの世代の中学3年も経験したことがないような不安や不満、あきらめ、空しさ、言葉では表現できない様々な気持ちだったと思い

ます。私には永久に皆さんの気持ちを理解することはできないと思います。

それでも学校生活の中で、毎日あいさつし、行事に取り組み、授業に参加し、当たり前ではない日々をよくここまで乗り切ってきました。学校から帰宅して、すぐに塾に向かい、夜遅くまで頑張った生徒も多かったと思います。大変な日々だったと思います。でもあと少しです。

令和2年2月27日(木)の夜、国から突然の一斉休校の要請がなされ、翌週から休校になりました。ちょうど1年前でした。皆さんの姿が学校で見られなくなってから、戻ってくるまで3ヶ月を要しました。長くて暗い寂しい毎日でした。「こんな毎日はいらない」と思いました。

4月の教科書配付の日、先生方は、皆さんの感染リスクを考え「感染を防ぐために教科書は外で配りましょう」と提案してくれました。膨大な量の新しい教科書を校庭に運びました。私は、先生方の姿を見て、とても感激しました。手を合わせたい気持ちでした。コロナ禍でも喜べる日があるのだなと感じました。5月の副読本の配付も同様でした。行政から「家庭訪問を・・・」という通知もありました。しかし、「私達が動き回って家庭訪問したら、逆にご家庭で不安を感じてしまうかもしれない」という先生方が多く、中止しました。コロナに関する情報がほとんどない中、判断材料が何もなく、迷いながらの毎日でしたが、先生方はいつも皆さんを優先に考えてくれていました。

学校が再開し、しばらくすると皆さんに疲れが見え始めました。「生徒が疲れているので4時間授業にさせていただきませんか」と提案してくれたのも、皆さんの身近にいる担任の先生方でした。「校長先生、4時間授業、ありがとうございます。」と声を掛けてくれた生徒たちがかかりました。でもそれは違います。皆さんを一番身近で見ていた先生方が提案してくれた事です。4時間の授業が終わって、笑顔で帰って行く皆さんを見て、「こんな日があってもいいな」と感じました。

皆さんは分かってくれていました。だから「感謝」や「助け合い」というテーマも生まれ、合唱祭の時に形となりました。とても嬉しかったことは、今も忘れられません。

それでも、日常生活が続くと、また大切な何かを忘れてしまって、お互いを傷つけ合ってしまったたり、登校するのが嫌になったり、先生方に注意を受けたり、そして反省して自分を戒めてみたり、勉強が手につかなかったり、家族と喧嘩になったり、でも進路に向けて真剣に頑張ったり・・・

そんな中学校時代がもう少しで終わります。公立高校の受験が終わると、すぐに卒業です。私の大切な恩師が教えてくれた言葉があります。「俺はいつも自分のクラスの生徒に、卒業証書を受け取る時、左手で過去を受け取れ、右手で少し先の未来を受け取れ。どちらも自分。そして新しい自分になるために卒業証書に一礼しろ。受け取って親に見せたら、後は何年も卒業証書を見るな・・・」当時は、「金八先生みたいなこと言って・・・、恥ずかしくないのかな。」とっていましたし、意味を分かろうともしませんでした。でも少しずつ分かってきたような気がします。

皆さんが卒業式で歌う「手紙」の中に「今 負けそうで 泣きそうで 消えてしまいそうな僕は誰の言葉を信じ歩けばいいの・・・ ひとつしかないこの胸が何度もばらばらに割れて 苦しい中で今を生きている・・・」という詩があります。本当に的を射た表現だと感じます。やがて、その苦しかった自分は、次にやってくる新しい世界で価値観を大きくし、「負けないで、泣かないで、消えてしまいそうな時は、自分の声を信じ歩けばいいの・・・笑顔をを見せて今を生きよう」と自己が確立され、変わっていきますし、実際に変わっていきます。それが皆さんが歌う「手紙」かな・・・。そして、それが卒業式です。苦しかったこと、楽しかったこと、あきらめたこと、あきらめなかったこと、泣きたかったこと、負けてしまいそうだったこと、でも負けなかったこと、信じられなかったこと、信じたこと、自分はだめだと思ったこと、でも一生懸命に頑張ろうとしたこと・・・

卒業式を、卒業の歌を大切にしてください。みんなで歌えるのはこれが最後。私には分からない様々な思いを抱いて、証書を授与し、大切に歌ってください。それが皆さんと共にこの危機を乗り切ってきた先生方の、そして私の願いです。卒業前の1通目の「手紙」でした。